

リサーチ



H.13.10.17

No.12

本物の追求を

先日届いたばかりの『教育展望10月号』に、お隣の並木小学校の事例を取り上げて、東工大の赤堀侃司先生（NHK教育テレビの講座などでおなじみの先生です）が論文を書かれていらっしゃるようですのでご紹介します。

記事の趣旨は、『インターネットと学習について考える』ことですが、まず次のように疑問を呈した上で、並木小学校の総合的な学習を例にネットワークについて論じています。

インターネットは、これまでの情報機器と異なるのが、もし異なるとすれば何が異なるのか、始めにそれを考察しよう。

並木小学校では、あるときある子どもたちが総合的な学習の時間に行った活動の中で、酸性雨について疑問を持ち、酸性雨がしみこんだ土をリトマス試験紙でその酸性度を測定したのだそうです。

詳細はわからないが、その結果を並木小学校のホームページに掲載したところ、地質の専門家がこの結果に興味を持って、一緒に研究したいと申し込んだ。このことがきっかけで、地質の専門家の指導を受けながら、酸性度の研究を続けたという。もちろん専門的な知識には大きなギャップがあるので、共同研究といっても研究の深さには大きな違いがある。しかしこれは、これまでの情報機器の意味とかなり異なっている。

～中略～

（ここでのインターネットの活用は）酸性土壌についての小学生と専門家との対話は、人と人が一つのテーマを追いかけてながら追求するという知的活動を支援する道具としての活用である。この道具の使い方は、これまでの使い方と考え方が異なっている。それは、本物の追求という点にある。

本物の疑問を追求するためには、このように子どもとか専門家とか、教科書に記載されているかどうかとか、学習指導要領の範囲であるとかないとかいった垣根をこえる。

～後略～

赤堀先生は、人と人を結び、あるいは人々の知を結びネットワークを実現する情報空間としての「インターネット」に着目して、それが学習に及ぼす良い効果について論じていらっしゃるようですが、私は別の視点からこの記事に興味を持ちました。

お隣の並木小学校が話題の中心になっているということも勿論ですが、それ以上に総合

的な学習について『あゝ、やはりそうだったか。』という感想を持ったのです。

この記事によれば、酸性雨に興味を持って探索を開始したこの並木小学校の児童は、専門家から『共同研究をしよう』という申し出を受けたことで、何と言っても「一人前の研究者」としての自分を意識することができたであろうと思われます。

総合的な学習で最も大切にしたいのは、「もう既にわかっている一定の知識」を習って覚えることではなく、「まだわからない未知のこと」や「わかっているようだが曖昧なこと」などについて、自らの手と足と頭で探り見つけだし創りあげていくことです。

そこでは、例に見るように専門家も子どももない。

研究のレベルで違いはあっても、未知のことについて「本物の追求をする」という意味では、専門家と子どもという垣根を乗り越えて「知の交流」をすることができるのです。

そのような本物の追求をする「いっちょまえの体験」は、子どもたちに学ぶ手応えを実感させてくれるでしょう。あるいは、自ら学びを切り拓く喜びを味わわせてくれるでしょうし、知の交流を通してより確かな「見方・考え方・取り組み方」を身につける余地を生んでくれることでしょう。それも自然な形で・・・。

そこにこそ総合的な学習の意味があるのですが、この例に接してますますその認識を深くすることができたのです。

ところで、ある会合である先生がこんなことをおっしゃっていました。

曰く、『学校現場では、来年からの新教育課程実施を控えて、その目玉ともいえるべき総合的な学習の研究実践に目を奪われている感があるが、そればかりでなく教科の研究にも力を入れて欲しい。』

いつか誰かがこんなことを言い出すのではないかと思っていました。

この発言は、その先生が総合的な学習の趣旨と意味をとらえきれていないことを表していることに他ならない、と私は考えています。

道徳の研究指定を受けた学校がそれに集中する余り、教科や領域の実践がおろそかになり、『教科の授業実践もしっかりやらなきゃ』とささやき合うのとはわけが違います。

なぜなら、総合的な学習の実践を重ね研究をするということは、とりもなおさず『学習』について考えることですし、子どもにとってより自然な『学び』、内発的な動機に基づいた確かな手応えに支えられた『主体的な学び』について工夫し探り、確立していく作業に他ならないからです。

それは、教科の指導にも跳ね返り、良い効果をもたらしてくれるはずですが、少なくとも「教えること」から「学ぶことの指導」への転換に私たちを導いてくれるはずですが。

また、子どもの側から言えば「教えてもらって習う」ことから「自分で問いに向き合って知恵を身につける学び」の構えを発揮して教科の学習に取り組む方向へと学びの様相を変えていくことでしょう。

その意味ではよく言われるように、総合的な学習は決して教科の学習を発展させた学習活動ではないのです。教科の学習で基礎的な知識をしっかり身につけさせなければ、総合的な学習で成果は望めない、などという言葉をよく耳にしますが、それは認識不足。

しかし、それは総合的な学習の時間に、子どもたちがいっちょまえの研究者として「本物の追求」をすることができるような環境を（場を）私たちが用意できるかどうかにかかっているということも銘記しなければならないでしょうね。

この例に描かれた並木小学校の子どもたちは、学ぶ喜びを実感できた幸せな子どもたちだと思いながら赤堀先生の論文を読ませていただきました。